内田百閒とロレンス・スターン
―『阿房列車』と『センティメンタル・ジャーニイ』を中心に

能　口　盾　彦

序

紀行文学作品として、我が国では日記形式による紀貫之の『土佐日記』や阿仏尼の『十六夜日記』に松尾芭蕉の『奥の細道』、滑稽本に組する十返舎一九の『東海道中膝栗毛』を数え、現代において司馬遼太郎の『街道をゆく』シリーズ等が挙げられよう。英国は18世紀に限ってもモンタギュウ夫人(Lady Mary Montagu)の『トルコ通信』(*Turkish Letters*)(1763)やジョンソン博士(Samuel Johnson)がボズウェル(James Boswell)と共にスコットランドを周遊した際認めた旅行記は『西スコットランド諸島紀行』(*A Journey to the Western Islands of Scotland*) (1775)と題され、[1] ボズウェル自身[2]は『ヘブリディズ諸島紀行』(*The Journal of a Tour to the Hebrides, with Samuel Johnson*)(1785)を上梓した。さらにリスボンで客死したフィールディング(Henry Fielding)が転地療養先に向かう行程を記した『リスボン航海記』(*The Journal of a Voyage to Lisbon*)(1755)やデフォー(Daniel Defoe)[3]の『ロビンソン・クルーソウ』(*Robinson Crusoe*)(1719)にスウィフト(Jonathan Swift)の『ガリヴァー旅行記』(*Gulliver's Travels*)(1726)等も例証されよう。古来より多数の文人墨客がこの他にも日英両国において得がたい紀行文を残しているが、内田百閒とロレンス・スターン(Laurence Sterne)もその例に洩れない。18世紀中期の英国文壇にあって鬼才スターンは傑作小説『トリストラム・シャンディ』(*Tristram Shandy*)で世に知られ、同書第７巻と８巻（1765年1月23日出版）の一部にはシャンディ一家の大陸旅行への記述が見られる。1767年1月30日発刊の同書第9巻には「ムーランのマリア」（Maria at Moulins）の話が挿

「言語文化」2-4：463－490ページ　2000.
同志社大学言語文化学会 ©能口盾彦

入されているが、遺作となった紀行文学作品『センティメンタル・ジャーニイ』(*A Sentimental Journey through France and Italy*)の逸話と酷似する。因みに『センティメンタル・ジャーニイ』出版後、一ヶ月も経ぬ1768年3月18日にスターンは持病の肺結核を悪化させてロンドンで亡くなっている。従って『センティメンタル・ジャーニイ』は作者スターンを思わせるイギリス牧師ヨリック（以後ヨリックと称す）がフランスからイタリアに入国して程なく、トリノ(Turin)への途上サヴォア(Savoy)の宿屋で突如絶筆を迎えた。スターンはイギリス国教会所属の田舎牧師であったが、1760年春に発表した『トリストラム・シャンディ』第１巻及び2巻で一躍文壇の寵児となった。このスターンと内田の作品を読むと、両者の作風が似通っている事に気付くであろう。両者を比較する論拠として、『トリストラム・シャンディ』と夏目漱石の『我が輩は猫である』のフィクション面での類似性がかねてより指摘され、[4] 漱石に傾注した内田の処女作品『冥途』には漱石の『夢十夜』の趣向が踏襲され、[5] かつ内田が『贋作我が輩は猫である』を世に問うている事例等から、論者は内田とスターン双方に接点ありと見定めた。加えて、『センティメンタル・ジャーニイ』でのヨリックの風情は一時的に感傷にふける事はあっても、元来は“怠惰な旅人”ではないかとの疑念から、内田の『阿房列車』の主人公「私」と符合するのではとの意を強め、本論執筆の契機と繋がった。内田には戦時下の東京での空襲見聞記『東京焼盡』もあるが、当論文では紀行文学作品に類する内田の『阿房列車』とスターンの『センティメンタル・ジャーニイ』を取り扱いたい。

1

伝記面から見ると、内田は故郷の岡山から上京し、東京帝国大学文学部を卒業の後、ドイツ語教官として陸軍士官学校に着任し、次いで海軍機関学校と法政大学を兼務する傍ら、夏目漱石に師事し、漱石全集の編纂等にも係わった。漱石没後に発表した『冥途』で文人として頭角を表し、[6] 『百鬼園随筆』や『旅順入城式』等を物し、卓越した洞察と文章力を駆使してエッセイストの名声を勝ち得た。その内田が昭和25〜30年にかけて都合14回にわたって日本各地を列車で巡った体験を基にして『阿房列車』は脱稿され、昭和27

年６月三笠書房刊（新潮文庫は『第一阿房列車』として昭和30年５月発刊）の『阿房列車』が日の目を見た。因みに三笠書房版『第二阿房列車』は昭和28年12月、新潮文庫の『第二阿房列車』は昭和30年8月、講談社版『第三阿房列車』は昭和31年3月、新潮文庫の『第三阿房列車』は昭和34年3月と版を重ねた。

琴は「春の海」等で知られる箏曲家宮城道雄を師と仰ぎつ朋友と呼ぶ程の玄人はだし、多趣味な内田の鉄道マニア振りが半端でないのは、列車の時刻表を見るのを無上の喜びとし、出発に際しては乗車する列車の機関車から最後尾の車両まで隈なく見ずには気が済まぬ程であったと言う。[7] 車窓からの風景をこよなく愛す内田は窓ガラスを拭く為にガーゼを持参し、「雪中新潟阿房列車」で車窓に目を凝らす「私」に、“ 但し、私のところの窓だけは曇っていない。前もってそれに備える用意をしてきた。ガーゼの布巾と小さな瓶に入れたアルコールを持っている ” (155)と語らせているが、汽車好きの読者には堪らない一節に違いない。

スターンは『トリストラム・シャンディ』で一躍時の人となり度々ロンドンに上京するようになるが、人生の大半をイギリスはヨーク郊外の寒村で過ごした。ケンブリッジ大学ジーザス学寮を卒業したスターンは聖職者として適性を欠くと言われたが、他に望ましい働き口も見当たらず、[8] ヨーク大聖堂で要職(archdeacon)にあった伯父スターン(Jaques Sterne)の薦めでヨークに赴任した。着任後程なくして伯父と袂を分かち、[9] 不遇を託つが近在の教区を兼任する一方、エンクロージャーに手を染めるなど理財活動に努めもした。[10] 小説家としての転機は、スターンがヨーク教会内で昇進の道が完全に閉ざされた時点と符合する。[11] この折のスターンがヨーク教会内の政争で舐めた挫折は、『トリストラム・シャンディ』第１巻第12章でのヨリックの死に再現、投影されているのではないか。

> —with so little mercy on the side of the allies,—and so little suspicion in *Yorick*, of what was carrying on against him, —that when he thought, good easy man! full surely preferment was o’ ripening. . .I beseech thee to take a view of my head.—I see nothing that ails it, replied *Eugenius*. Then, alas! my friend, said *Yorick*, let me tell you, that ’tis so bruised and mis-shapen

with the blows which ***** and *****, and some others have so unhandsomely given me in the dark, that I might say with *Sancho Pança*, that should I recover, and “Mitres thereupon be suffered to rain down from heaven as thick as hail, not one of them would fit it.”[12]

文壇デビューを果たした後は教区牧師としての職責を十二分に果たせぬまま、ロンドンにしばし滞在したり、学生時代からの持病の肺結核治療の為にフランスに逗留したことも忘れてはならない。『センティメンタル・ジャーニイ』がスターンの旅行に裏打ちされたと思われるのも、同作品が1762年から64年にかけ、さらに1765年から66年にかけて二度にわたって大陸を旅したスターンの体験に基づいたと推断されるからである。転地療養の旅すがらにスターンが作品のヒントを得たと考えられるが、実体験と作品の内容とは必ずしも一致しない。それがフィクションたる所以で、『センティメンタル・ジャーニイ』で作者スターンの闘病を窺わせる箇所は見出し難い。全篇がプラトニック・ラブ探求の旅かと思わせる内容で、本文中には“ ’t is a quiet journey of the heart in pursuit of NATURE, and those affections which arise out of her, which make us love each other—and the world, better than we do. ”[13] と記される。旅の効用の一つとして自己研鑽をあげる作者は、ヨリックに“ I have a mortal aversion for returning back no wiser than I set out ” (231)と語らせてドーヴァーに至らせ、パスポート不携帯の理由だけでオメオメと引き返せぬとフランスを目指させる。

一方、『阿房列車』で「私」が旅の目的を大仰に告白する箇所は皆無に等しい。列車に乗り込んで、持参の弁当を肴に一献、宿に着いて地元の名士を交えて酒盛りに興じる。翌朝は寝ぼけ眼で列車を乗り継ぐのが「私」の旅のパターンである。仙台へ行こうが、鹿児島に向かおうが、『阿房列車』の旅人の有り様は一向に変わらない。一方、『センティメンタル・ジャーニイ』の主人公である「私」“ I ”は、『ハムレット』に現れる道化師ヨリックとは、“ The Yorick your lordship thinks of has been dead and buried eight hundred years ago. . .the other Yorick is myself, who have flourish’d, my lord, in no court— ” (286)であるとし、スターンの作品や説教集では作者の分身の如き働きを成す。『センティメンタル・ジャーニイ』で旅の効用を説く為に、多情多感な

ヨリックを徘徊させるのだが、転地療養に専念する作者自身の姿をオーバーラップさせるには少々無理がある。作者自身が自己の体験を叙しながら、その折々の心境を吐露する私小説に足る『阿房列車』と、作者の分身とは言えヨリックの言動に虚構性を帯びる『センティメンタル・ジャーニイ』とでは、作者と作品の密着度に温度差がある。フィクションの項目に組入れられるには、他人の実体験を拝借して状況設定を踏襲しながら、独立した虚構の世界に構築し直す必要があるがゆえ、如何に『ロビンソン・クルーソウ』や『ガリヴァー旅行記』等の作品がリアルであれ、私信や日記に類するモンタギュウ夫人やフィールディングの所産と比べてはるかに虚構性、作り事らしさに富んでいる。『センティメンタル・ジャーニイ』では作者は死の影を引き摺りながらも読者にはおくびにも出さず、若さへの憧憬を漲らせつつ、生の鼓動を主人公に繊細に感じ取らせる事から、純然たる私小説の印象を与えない。私小説に類する『阿房列車』[14]の旅と虚構性の色濃い『センティメンタル・ジャーニイ』とでは比較の対象にならぬ恐れがあるが、両作品はいずれも「私」の視点で語られ、それぞれに相共通する人物描写、用語法、旅の形態と目的、旅行者の行動規範等に同類項的要素が認められる。

2

『センティメンタル・ジャーニイ』の“ sentimental ”の語根である“ sentiment ”とは18世紀半ばまでは「考え」或いは「意見」の意で使われてきたが、スターンの用例を契機として、「洗練された優雅な感情」とか「感受性の発露」の語意が加味された。英文学史にあってセンティメンタルの語義を変えた作品として認知され、わが国で『感傷旅行』と訳されるのも至当で、洗練された感情に溢れた旅となる。一方、『阿房列車』の“ 阿房 ”とは秦の始皇帝が渭水の南に築いた「阿房宮」に由来し、我が国では“ 阿呆 ”とも書く。タイトルからして奇抜な「特別阿房列車」の書き出しには、“ 阿房と云うのは、人の思惑に調子を合わせてそう云うだけの話で、自分で勿論阿房だなどと考えてはいない ”(9)と記されている。目的無き旅の有り様が読者に阿房と映るが、作者はいたって大真面目なのである。

『センティメンタル・ジャーニイ』執筆に際し、スターンは1767年11月12

日付けのジェイムズ夫人(Anne James)[15]宛ての手紙の中で、“ I told you my design in it (*A Sentimental Journey*) was to teach us to love the world and our fellow creatures better than we do ”[16] と執筆意図を明言している。さらに『センティメンタル・ジャーニイ』巻頭にて、ヨリックをして大陸旅行に駆り立てる契機が会話のやり取りから明らかにされる。

> —They order, said I, this matter better in France—
>
> —You have been in France? said my gentleman, turning quick upon me with the most civil triumph in the world. —Strange! quoth I, debating the matter with myself, That one and twenty miles sailing, for ’t is absolutely no further from Dover to Calais, should give a man these rights—I’ll look into them:(3)

ヨリックのこの自問の言葉から作者スターンの旅立ちの理由と定められ得ないが、旅行記としては実に効果的な書き出しと言えよう。知ったか振りを咎められたヨリックは憤然として旅支度を整え、フランスへ旅立つのである。見栄っ張りと思わせるスターンの筆致には既存のフランス紀行、大陸旅行記より自身の見聞が確かとする自負心が漲っている。次いでヨリックがパリで出会った老士官(the old French officer)の口を通して、作者は旅の目的を次の様に語らせている。

> —that the advantage of travel, as it regarded the *sçavoir vivre*, was by seeing a great deal both of men and manners; it taught us mutual toleration; and mutual toleration, concluded he, making me a bow, taught us mutual love. (216)

旅の利点は多くの人種と習慣を見ることで、お互いに相許すことを教え、許し合うことが愛し合うことを教える、と説く老仕官の言葉に、旅にあって人との出会いに力点を置くスターンの姿勢が見受けられる。

一方、『阿房列車』の語り手である「私」と同行者が遭遇する人物は限られ、列車で相席客と話が弾んだと言った逸話は皆無に近い。同書には作者を思わせる「私」と、後年内田文学の批評家で良き理解者となった平山三郎、別名ヒマラヤ山系が登場する。『阿房列車』にあって旅の目的を家来同然のヒマラヤ山系に「私」が明言する謂れも無く、乗車することが旅の第一の目

的ゆえに論じる必要も無い。しかしながら、「特別阿房列車」冒頭に次ぐ一節、“何にも用事が無いけれど、汽車に乗って大阪まで行って来ようと思う”(9)は並の阿房が口にする言葉ではない。[17] それは日常生活からの解放を狙うも、盛り沢山なスケジュールに振り回されて旅本来の楽しみを見失い、美しい山野の風景を見るだけの心と時間の余裕無き現代人への批判、痛烈な皮肉ともとれる。同様の観点から、川村二郎も『阿房列車』を次の様に評している。

> 種や材料を排除した、何の内容も持たない文章。それは結局、言葉による音楽にほかならない。『阿房列車』の旅が何の用事もないのに反復されるのは、旅行者の心事に即して考えれば、用事への嫌悪、ひいては用事を第一義とする日常世界の否定というようなことになり、そこから近代文明批判や前近代的乃至ロマン的な怠惰礼讃を読み取ることも多分可能である。[18]

川村が示唆するように、『阿房列車』は戦後の混乱期を脱して効率性追求に狂騒したバブル崩壊以前の日本への警鐘であったのかもしれない。怠惰とは対照的な効率性を第一に追求する戦後の日本及び日本人の生き様への諷刺と解釈可能な作品が、戦後の荒廃直後の全国縦断の旅において生まれたことは、戦後復興の歴史と照らし合わせて見ても実に興味深い。

二つの紀行作品には単なる物見遊山、トラベル・ガイドにあらずとの共通認識が窺える。スターンの旅は当時の異国趣味の旅行記とは趣を違え、現実の事物を具に眺めるのではなく、想像力を駆る心の旅である。愛すべき或いは同情に値する対象に誘われては脇道にそれる旅の形態、意識の旅がスターンの旅の本質と定める事は可能である。これに対し、内田の旅は列車利用の旅ゆえ、主人公がたとえ目的無しとは言え、目的地は極めて明白である。かの地を踏めば、名所を見物せずとも目的は適い、たちどころに復路に着く旅である。列車好きの阿川弘之によると、６本の『阿房列車』の旅で合計走行距離は9936.5キロ、網走―鹿児島間を２往復、[19] また別の試算[20]では25800キロ、網走―鹿児島間を４往復半走破した事となる。わき目も振らず、ひたすら走るという点ではまるで正月恒例の「箱根駅伝」の如くで、『阿房列車』で観光の為に途中下車などもっての他である。東北地方を巡る旅の途中、芭

蕉ゆかりの立石寺の存在を駅構内の名跡案内板によって初めて知った「私」だが、途中下車する素振りも見せない。『奥の細道』のメッカとも考えられる山寺を無視するかの主人公の行動は、紀行文を認める者として、芭蕉に対する内田のライバル心の表れと解釈されよう。『阿房列車』で「私」は山寺どころか観光地化した箱根や日光や江ノ島等には金輪際行くものかとの意を示す(33)。そこには凡俗に流されまいとする作者の人生観、価値観が反映されていよう。内田の信条に従えば、見物も用事となるからしないとなり、[21]芸術院会員候補の推薦を「イヤダカラ、イヤダ」[22]と固辞した彼の心持ちにも相通じる。列車で巡る旅の目的は飽くまであくせくせずに旅本来の出会いを楽しむべきなのだが、名所旧跡巡りに拒否反応を示す「私」にはへそ曲がりな性格が見え隠れする。

『阿房列車』と『センティメンタル・ジャーニイ』のそれぞれの主人公に体面を重んじる意固地で偏屈な性格が共通し、時に周囲と軋轢を生む。だがこうした一風変わった性格振りが両作品に面白みを与えているようである。『センティメンタル・ジャーニイ』でカレーの宿に尋ねてきた聖フランシスコ派の老修道師から喜捨を求められるが、ヨリックは老師の申し出を頑なに拒否する。転じて煙草入れを相互に交換する羽目に至るが、イギリス国教会の牧師としてのスターンの対抗心がヨリックに次の如く言わしめている。

> … we distinguish, my good father! betwixt those who wish only to eat the bread of their own labour—and those who eat the bread of other people's, and have no other plan in life, but to get through it in sloth and ignorance, *for the love of God.*(18)

他人のパンを食べ云々と邪宗の如く罵倒するヨリックの批判と、老師のみすぼらしい風体描写に、スターンの宗教心や対抗心が物語られている。『阿房列車』の主人公も同様で、体面を重んじては見栄を張る。例えば、ヒマラヤ山系が持参したボストンバックのみすぼらしさを「私」は見咎め、犬とも猫とも称するのが可笑しい。“ 犬が死んだようなきたならしいボストンバッグ ”(40)、“ そのボストンバッグが甚だきたならしく、山系が持って来たのだが、死んだ猫に手をつけてさげた様で、丸で形がない ”(80)と、さらには“ きたならしい、猫が死んだ様なボストンバッグの成せる業なのである ”(105)と

酷評するのも、旅館の客あしらいを懸念するあまりに発せられた「私」の言葉である。結局のところ、ヒマラヤ山系のボストンバッグは見栄えのする物に代えられた(80)。実生活にあって内田は絶えず高利貸の督促に窮するのだが、列車は一等車を愛用するのが常であった（184)。そのくせ食堂車に長居すること頻繁で、折角の座席を暖める暇もない。福島の宿で板場に茶代を置くのを女中に無駄と言われ、引っ込みが付かなくなる「私」はまさに内田本人なのである。「私」の言動やヨリックの心の振幅から、二人に見栄っ張りで体面重視の性癖が指摘される。

3

次に主人公と従者との関係から、『阿房列車』と『センティメンタル・ジャーニイ』でのコンビの間柄について考えてみたい。紀行文学作品にあって数多くの登場人物が紙面を賑わす事は稀で、『東海道中膝栗毛』は主に弥次郎兵衛・喜多八が道中や旅篭で繰り広げる騒動の数々を織り込む道中記である。遭遇する人物は数知れないが、主たる登場人物が小人数に限られることは間違いない。『センティメンタル・ジャーニイ』ではモンルイユ(Montriul)の町からラ・フルール(La Fleur)と言う名のフランス人がヨリックに同行する。牧師の体面上から従僕の必要性を認めたヨリックが彼を雇うこととなる。既存の道中記では主人等一行は大概が徒歩の旅であったが、ヨリックとラ・フルールは主に馬車を、内田とヒマラヤ山系は鉄道を利用する。乗りそこねたり、乗り換えを間違えねば予定の時刻に目的地に到着するので、ある意味では列車の旅は気楽な旅で、置き引きやスリに気を付けねばならぬが、追いはぎに遭う懸念は無い。『阿房列車』の旅で執筆者に同行する旅先案内人、ヒマラヤ山系こと平山三郎は鉄道省現業調査課で発行する全国の鉄道職員の教養雑誌「大和（たいわ）」の編集に携わっていた。『阿房列車』では寝台列車の上段ベッドに攀じ登る姿から、ドブ鼠とも称される風采の上がらぬ男として描かれるが、ヒマラヤ山系は決して無能な人物ではない。彼はエリート職員でこそないが、『阿房列車』では駅長や助役、さらに元同僚らと「私」の仲を取り持つ役割を演じている。地元の名士と宴席に集うが、ヒマラヤ山系のうだつの上がらぬサラリーマン風情が面白い。先々の関係者との交渉を一手に引

き受ける旅行会社の添乗員の如き存在なのである。ドン・キホーテに同行するサンチョ如きに描写されるが、腰は軽いが誰にへつらう事なき不言実行の男がヒマラヤ山系なのである。取り柄が有るかと問われれば、酒豪の主人公に相伴し、俗に言う馬が合う事であろう。５年間にわたる『阿房列車』の取材旅行で内田の同行者はいつもヒマラヤ山系であった。[23] 二人の関係は、ボズウェルとジョンソン博士の小型日本版と言えよう。出しゃばらず、議論を持ち掛けること無く、寡黙なところが内田の同行者として及第点に達し、主人公と当地一流の宿屋[24]でひたすら酒を酌み交わす。酒癖の悪くないヒマラヤ山系の酒豪ぶりが内田の気にとまったのであろう。一方、『センティメンタル・ジャーニイ』でフランスを徘徊するヨリックの従僕であるラ・フルールの役割は主人の私設秘書如きで、ヒマラヤ山系と比べ物語中で殆どその存在は問えない。従僕然としたヒマラヤ山系やラ・フルールが物語の前面に出ないからと言って、無用とか逆に不可欠な存在と定めると疑問が残るが、気難しい主人公と同行するには彼等をおいて他に無いのである。

旅姿に隠された旅人の本質をめぐり、『センティメンタル・ジャーニイ』に興味深い一節がある。

> … but as they might also save themselves and others a great deal of unnecessary trouble by saving their money at home… I shall distinguish these gentlemen by the name of Simple Travellers. Thus the whole circle of travellers may be reduced to the following *heads:* Idle Travellers, Inquisitive Travellers, Lying Travellers, Proud Travellers, Vain Travellers, Splenetic Travellers, Then follow The Travellers of Necessity, The delinquent and felonious Traveller, The unfortunate and innocent Traveller, The simple Traveller, And last of all (if you please) The Sentimental Traveller (meaning thereby myself), who have travell'd, and of which I am now sitting down to give an account—as much out of *Necessity*, and the *besoin de Voyager*, as any one in the class. (33-4)

この規定を『阿房列車』に当てはめると、主人公達は何も目的を有せず、怠惰な旅行振りが故に“idle traveller”と定められるのではないか。『阿房列車』の登場人物達が観光がてらに名所旧跡を尋ねたりすることはまずあり得な

い。早起きが苦手な主人公は動作に俊敏さを欠くが、お気に入りの列車には万難を排して乗り込もうとする(182)。内田は自宅また旅先で一人になると列車の時刻表を嬉々として見入ったらしく、その傾注振りが偲ばれようというもの。それではヨリックがどの範疇に入るかと問われると、“sentimental traveller”に組されてきた。研究者や読者達が感傷性を『センティメンタル・ジャーニイ』に指摘するのも、旅人心理に焦点を当てた結果であり、スターン自身もその意向である。だが旅の有り様がそこでは全く問題とされてはいない。即ち、旅の目的の有無からも旅人を類別していながら、情緒面からのみヨリックを分類しようとする作者の恣意的意向が働いている。本文では主人公の涙腺を刺激する逸話が連続するばかりで、ヨリックの旅の目的が釈然としない。原文ではどの旅人よりも必要に迫られてとあるが、全篇を通してヨリックの用件は不明である。交戦状態にあったフランスを旅券無しで旅する主人公に、人々との出会い、例えば婦人の脈をとっては心の鼓動を推し量る事に意義があろうとも、ヨリックにはそれ意外に確たる旅の目的が有ろう筈が無い。感じやすい旅人として涙もろいヨリックが描出されはするが、『阿房列車』の「私」同様、怠惰な旅行者(idle traveller)の枠組みに入るのではないか。同じ怠惰な旅行者を扱いながら、タイトル選定をめぐり、“怠惰”と“阿房”を合一させた内田と、あくまで“センティメンタル”の語に固執したスターンとの認識に差異があるが、読者の反応を両者が念頭に入れたことには間違いない。

4

本章では内田とスターンの記述方法を問題としたい。作者の絶対的立場を活用して、自己の道徳規範を押し付ける18世紀当時の文筆家リチャードソン(Samuel Richardson)やフィールディング等とはスターンは一線を画している。衆目の一致するのはスターンが印刷術を駆使したことであり、その典型が『トリストラム・シャンディ』であろう。同書では伏せ字や星印やダッシュが多用され、猥褻な箇所は曖昧模糊とした表現に終始し、物語の内容に符合するかの様に黒塗りや空白の頁、さらには大理石模様やネジ巻き図形の頁等が挿入される。そこには文字表現に依存すること無く、物語の展開を読者の

想像力に委ねる作者の周到な計算が隠されている。『トリストラム・シャンディ』での読者の度肝を抜く小説技法は『センティメンタル・ジャーニイ』にも一部踏襲され、卑猥で意味深長な場面ではダッシュが多用されている。旅の途中で女性から託された手紙をパリのR...夫人の許に届け、顔見知りとなった同家の可愛い小間使いと再会したヨリックは、滞在するホテルの自室で彼女の片側の靴ひもを留めてもう片方もと持ち上げた拍子に乙女をひっくり返す。その箇所の原文の続きは“ —and then— ”（311）とダッシュに始まりダッシュに終わり、[25] ヨリックの椿事を示唆する“ The Temptation—Paris ”の章は終わる。次章のタイトルが「征服」とか「獲得」をも意味する“ The Conquest ”とあることから、「勝利」[26]と訳すより「超克」が至当で、前章の危機をヨリックが理性で克服するという内容予告の役割を担う。

『阿房列車』における表現上の特徴として、本論２章で挙げたヒマラヤ山系のボストンバック描出の如く、状況設定や表現、会話のやり取りが重複する傾向は否めない。その筆致に微妙な差異は認められるが、『阿房列車』シリーズの後半ではマンネリとの批評も出かねない。『阿房列車』で「私」とヒマラヤ山系の会話は車中や旅館でとり交わされるが、ちょっとした会話のやり取りから読者は笑いに釣り込まれる。そこに内田流ユーモア精神が発揮されるのだが、[27] 長々としたやり取りや、冗長な印象を与える対談形式から生まれることは無い。例えば「東北本線阿房列車」で「私」は教え子の矢中懸念仏と盛岡で酒席に臨み、健康不安を抱える懸念仏から杯を取り上げ、彼に酌をさせる。学生時分から髪の薄かった教え子は今ではすっかり禿げ上がり、“ つるつるの禿頭にお酌をさせて大変うまい ” (112)とばかり美酒を堪能する。懸念仏のハンデをあからさまに嘲弄するが、最後の“ お酌をさせて大変うまい ”の言葉に読者は救われる。このあたりが内田の人情味溢れる人柄を反映し、身体的特徴を単にあげつらうだけの低級な笑いとは次元が違うのである。

さらに内田のネイミングの面白さには定評がある。まだ死なぬとばかり「摩阿陀会」と称する大盤振る舞いの新年会とか、客に足を踏み入れさせぬ離れ屋を「禁客寺」と称したり、自作のタイトルにしても、処女作が『冥土』で遺作が『日没閉門』とあり、ユーモアに皮肉が込められた表現は数知れな

い。教え子や編集者、新聞記者や知人は無論のこと、事物に至るまで内田の鋭い観察眼から逃れることは出来ない。

凡人には解せない主人公の自己矛盾も際立つ。望郷の強い思いに駆られながらも帰郷を拒み(341)、金策に走りまわるのにハイヤーで乗り付けて無心する内田の理不尽さが例に引かれるが、[28]『阿房列車』では温泉逗留がその典型であろう。『阿房列車』での入浴記述の過少さは他と比べても歴然で、まるでカラスの行水である。解せないのは内田が大の風呂好きで自宅では毎日湯を使う。内田が『阿房列車』の取材旅行で温泉に浸る事は極めて稀であったとか。機会は数しれずあっただろうに、生涯温泉に入ったのは３度にすぎないと言う（117-9)。一度は湯河原で湯治中の漱石の許を金策の為に訪ねた折と台湾旅行で一度、最後は浅虫温泉とかで、風呂好きで温泉嫌いな理由がまたふるっている。

> 湯に入るのがきらひではなくて、温泉を好かないわけは、温泉場は人がゐるから行きたくない。又その土地でも宿屋でも、人が来るのを待ってゐる。向こうがそのつもりでゐる所へ、だれが行ってやるものかと思う。(118)

風呂好きの温泉嫌いが読者には意外だが、作者の偏屈な性分への反発を呼び覚ますより、温泉地に泊まって温泉に入らぬ馬鹿はいない、とのぼせ上がるまでに湯を浴びる庶民感覚とのズレが読者の笑いを呼ぶであろう。

一方、スターンはヨリックを操っては、彼の心の軟弱さを吐露することによって読者を笑いに誘う。牧師でありながらヨリックの品行はさにあらず。[29]法衣をまとった主人公ヨリックが女性の気を引いたり、訳も無く大仰に涙にくれたり、たわいない見栄を張ったりする軟弱さ、無節操さを読者は笑うのである。その点で『阿房列車』の「私」が遭遇する女性は教え子の妻とか旅館従業員と極めて限られ、気の利いた同行者ならいざ知らず、ヒマラヤ山系との二人旅では見世物小屋を冷やかす事はあっても(72)、色恋沙汰は生まれそうにない。それでは“ idle traveller ”然たる内田扮する「私」とスターンの描くヨリックが読者に何を語り掛けようとするのか。スターンの場合は主に女性との出会いからヨリックの心の動き、心理描写に力点が置かれている。ヨリックは同行者の存在を意識することなく、[30] 乙女や貴婦人を視野に捕ら

えて放さない。内田の場合には会話が多用されるが、ヨリックは語らずして、吐息やかすかな息づかいに双方の隔たりを消滅させようとする。かすかに肌がふれあう刹那の心の動揺、血潮の巡りを精微に描写するスターンの手法は、筆者の青春願望、裏返せば死からの逃避ではなかろうか。事実、『センティメンタル・ジャーニイ』では老師やマリアの父の、また天然痘で亡くなる二人の息子や驢馬等の死が言及されている。[31] 人との出会いと心的高揚が繊細なタッチで物語られ、去来する血の巡り、心臓の鼓動に男女の情交が抽象化され、普遍的な愛として昇華する。内田の場合、「私」と女性との接点が車中ではかられる事は稀で、先々での出会いの対象も縁者ゆかりの女性達に限られる。旅の一夜の恋愛事件が挿入され、内田一流の笑いで猥褻性を消滅して欲しかったと願うのは論外と言うもの。[32] 主人公が老境のせいか、それとも元大学教官としての自負心のなせる業なのか、或いは同行者の存在が恋の成就を阻むのかは判断がつかない。内田にはヒマラヤ山系が帯同するが、初老のヨリックとてラ・フルールという従僕が控えている。ただ定め得ることは、『阿房列車』では「私」の関心が女性に向けられるのではなく、列車の旅を如何に堪能するかに払われている点であろう。変わり行く風景に目を凝らし、列車の進行に身を委ねる「私」には金属音が騒音とは響かず、快い振動が夢見心地に誘う。私小説とフィクションの狭間で、『阿房列車』に椿事のハプニングを求めることは無い物ねだりに等しく、『センティメンタル・ジャーニイ』では惜別の情や感傷に力点が置かれ、人の個としての存在証明が他者との出会いと別れに描出されると言える。

5

『阿房列車』や『センティメンタル・ジャーニイ』に登場する女性達の人数や職種が限定されると前章で述べたが、女性の言動パターンにも共通項が指摘出来る。「鹿児島阿房列車」で「私」達は鹿児島から八代に向かう車中、鹿児島の宿屋が用意した白米だけのお結び弁当を食べ残し、捨て切れずに八代の宿まで持ち越す。八代の宿屋に着いた「私」は若い二人の女中に次のように申し出る。

汽車の中で食べ残したのだけれど、捨てれば目が潰れるだろう。し

かし僕等はもう食べたくないのだ。それで八代のこのお宿まで持って来たのだが、勿体なくない様に何とか始末してくれないか。自分達の食べ残した物を持って来て、御当地さんやもとじまさんに食ってくれなぞと、そう云う失礼のつもりで云ってるのではないが。(95)

なにしろ今宵の宿は当地一流の旅館である。風変わりな客の申し出の真意を測り兼ねた彼女達の困窮する様が目に浮かぶようである。「私」が言う“勿体なくない様に何とか始末してくれないか”との申し出には、若い彼女達ならずとも対応に苦慮するところである。食べてくれとは申しはせぬとの婉曲な言い回しではあるが、何しろ今宵の客人からの依頼に二人はオロオロするばかりである。そこに現れた女中頭が宿の犬にやると事も無げに言い放ったことに、「私」は大いに腹を立てる。それでは主人公は八代の接客係に如何なる処置を願ったのか。同様の逸話が「区間阿房列車」にも挿入されている事から、内田の真意が測られるのではなかろうか。代用米で作られた焼き飯の余りの不味さに、「私」は食べ残したとの記載がある(43)。その後の処理は本文にふれられていないが、後日談としてヒマラヤ山系、即ち平山三郎が食べたと言う。[33] 八代で「私」が求める“勿体無くないように何とか処分してくれ”とは、食べないで良いとは申せ、「勿体無くて食べ残したお結びを、無駄にしたくないから食べてくれ」との願いに他ならない。家来然のヒマラヤ山系には勅命とわかるが、若い娘達は困惑の極みである。心根を全く解せない女中頭が畜生の餌にすると返答する顛末に、彼女の短慮さがあると「私」は主張したいのであろう。[34] もっとも、彼女達ならずとも、衛生状態の良くなかったあの頃、昭和26年6月に取材旅行が成された事に鑑み、梅雨時の列車内での食べ残しを、婉曲ながらも勿体無いから食べてくれとの理不尽な申し出には、八代の女性ならずとも誰しも当惑するばかりであろう。

『阿房列車』の主人公たる「私」、即ち内田が遭遇する女性は圧倒的に旅館関係者が多い。接客を旨とするとは言え、名旅館と言えども昨今では接客が事務的となるのは止むを得ないが、彼女たちの対応が随所に挿入される。ドンチャン騒ぎを嗜める秋田の女中(161)、煙草のピースは切らしているが、缶入りなら有ると返答する山形の老女中(136)、自分はちゃっかり心附けを手にするが調理場への茶代は要らぬと言い張る福島の女中（105)、心付けを

貰ったかと「私」に問われて呆れ返る鹿児島の女中(83)、客層を目ざとく推し量る大阪の女中(81)等々、彼女達の立ち居振る舞いに関した箇所が実に多い。そこには主人公への諌めもあるが、旅館接待のパターン化が揶揄されている(237)。到着した客を部屋に案内し、茶菓の接待に始まり、お風呂にしますか、夕食は何時に、と自分達の予定行動に客を乗せねば彼女達は気がすまない。日常生活からの解放感を求める客が彼女達の日常作業に放り込まれるのだから、気がすすまぬのは内田だけではあるまい。旅館従業員としての現実的対応は効率上避けられないが、八代の女中頭の即物的反応の件を読むと、スターンの描く直情径行で唯物的価値観に左右される女性、例えば『トリストラム・シャンディ』のトリストラムの母、シャンディ夫人かと見まごうばかりである。[35]

次に『センティメンタル・ジャーニイ』では女性登場人物が如何に描出されているか見てみたい。ヴェルサイユでパスポート斡旋を果たすB...伯爵に、“—there is not a man upon earth who loves them (women) so much as I do: after all the foibles I have seen, and all the satires I have read against them, still I love them;”(279)とヨリックは大見得を切る。女性のあらゆる弱点を見、女性についてのあらゆる諷刺を読んだ後でも、なおも女性を愛するとの言葉は、女性を愛するがその弱点を看過出来ぬとの表明に他ならず、ヨリックの女性への関心の程を示す。ついては一例を挙げたい。軽視されがちな箇所だが、男の甘言で前言が翻る件にスターンの女性観の一端が窺えるのではないか。『センティメンタル・ジャーニイ』で哲学者風情の男性がパリの往来で女性にのみ喜捨を求めては成功を収める様子に、男の手管が分からぬとヨリックは呟く(320-1)。場面は移り、哲学者風情の男への言及は見られぬが、読者への解答として用意されるのがパリのオペラ・コミック座付近で辻馬車を待つ姉妹とヨリックの遭遇箇所であろう。物乞いされた中年姉妹は当初は小銭で満足させようとするが、美しくお情け深いお嬢様との男の巧言に、１スーの代わりに12スーを乞食に恵む羽目となる(364)。『センティメンタル・ジャーニイ』ではヨリックが目星をつけた女性は彼に手をとらせる。理性で情熱を克服出来るのも品行方正なヨリックであればこそと作者は語るが、奇妙なことには女性の反応が一切陳述されていないのも不思議である。前作『トリストラ

ム・シャンディ』で示唆された受動を旨とする女性観がここでも展開され、内田のそれと一脈通じるのではなかろうか。

6

『阿房列車』と『センティメンタル・ジャーニイ』が共に好評を博した理由を考えたい。これまでの紀行文の目指す観光ガイドブックの類とは一線を画す作風が、無類の列車好きが、息のあったコンビ振りが両作品の読者に感興を催させたのかも知れない。旅に出れば時間の許す限り駆けずり回り、疲れ果てるのが日本人の習いで、旧来の紀行文献とはそうした読者の感覚や要望にそった所産ではなかったか。例えば『東海道五十三次』で大当りをとった安藤広重の許には各地から注文が殺到し、多忙を極めた広重が採った策とは、自ら当地に出かけずに、各地の沼沢や渓谷等を描いた既存の絵をヒントに空想力を駆使して描いたとか。内田の場合はどうだったか。『阿房列車』は実際の旅の進行に併せて執筆されたが、『阿房列車』ブームの火付け役としての旧国鉄の対応も見逃してはならない。名文家で汽車好きな内田の存在は鉄道事業団体にも好都合で、交渉に当たった平山三郎の尽力も大きかった。旧国鉄がスポンサーとの批判に、協力を得ることはあっても全て自前と内田は反論する。[36] 出版社の負担かその辺りの事情は物語から判読出来ないが、『百鬼園随筆』等によりエッセイストとしての名声を得た内田に対し、行く先々で様々な便宜がはかられたことは間違いない。戦後とは言えまだ大らかな時代、航空機との競合無き時代にあってこそ、『阿房列車』の企画がスンナリと受け入れられたのであろう。仮に内田が飛行機を愛好したとしても、[37] 兼高かおるに代わって世界の空を飛ぶ訳には参らず、逆に兼高が列車の煤煙でススだらけになっては台無しである。鉄道マニアの内田であればこそ、列車の旅は限りなく至福の時に他なく、狭い東京の我が家を離れ、日常性から離脱するこの上なき自由で贅沢な旅であった。列車の時刻表には追われても、時間そのものに追われること無き贅沢さがそこにある。旅の目的が列車に乗るという多分に子供じみた趣味を、世間の人の間尺で“阿房”、“阿呆”と呼ばせるパラドックスを内田は計算しているのである。

一方、『トリストラム・シャンディ』の成功により懐具合が随分豊かにな

ったスターンではあったが、自らの転地療養の費用捻出やフランスに滞在する妻子への仕送り等で逼迫したのも事実で、『センティメンタル・ジャーニイ』執筆の意向もこの辺りの事情を無視して考えられない。経済事情を考慮しつつ、異国趣味に沸く当時のアパー・ミドル以上の読者層を念頭に、スターンは従来の旅行物語とは趣を違えた新たな旅物語を目論んだ。英国文壇でのライバルであったスモレット(Tobias Smollett)が1766年５月に『フランス・イタリア旅行記』(*Travels through France and Italy*)を出版した事もスターンの創作意欲を甚く刺激したことは間違い無い。[38] 病の進行から余命幾許も無き事を悟ったスターンが、『トリストラム・シャンディ』の読者に紀行作家としての可能性も示したかったのであろうが、『センティメンタル・ジャーニイ』刊行後の早過ぎるスターンの死には道半ばの印象は拭いがたい。

『センティメンタル・ジャーニイ』と『阿房列車』が読者に訴えるのは共にその物語性にある。名所旧跡を徘徊する旧来の記述を排除し、ひたすら主人公の世界を描き尽くそうとした点である。スターンは男女の出会いと心理描写、人情の機微に生と死を、内田は線路を走破することで旅に終止符を打つ。情景描写や会話のやり取りにそこはかとなくユーモアが漂い、読者は微笑み、時に主人公らの愚行に吹き出すのである。スターンは人生の黄昏、人との離別を捉え、死からの逃避の便法としてのプラトニックな心の動きに焦点を当てる。これに対し、全国漏れなく鉄道で回りおおせると、『阿房列車』の旅は必然的に終焉を迎える事となる。この現実的かつ有限の世界に、内田が『冥途』等で培った幻想の世界は再現され得ないが、日常生活臭を感じさせぬ、凡人の生活枠では捉えきれない“怠惰な旅”が確立されたのである。旅路がいずれ終末を迎えるとは思いつつ、次号を心待ちにする読者に対し、さらなる旅を期待させる魅力は作者を思わせる「私」の個性にある。その点ではヨリックも例外ではなく、物語の展開はイギリス牧師の個性溢れる魅力に負っている。ヨリック同様に頑迷な「私」だが、彼の庶民性に魅力がある。食堂車に長居して一等車の特権的待遇を享受できぬ喜劇性、勿体無くてお結びを捨て切れぬ貧乏性、風呂好きが名物温泉に入らぬ不可解さを帯び、各地の名旅館に泊まるが宿の由来や山海の幸メニューへの言及を控える等、読者に反発を抱かせまいとする配慮がなされている。難解な『百鬼園随筆』等の

エッセイを理解し得ぬ庶民の存在を意識し、新たな読者層を獲得しようとする作者の意欲がここに認められる。一方、“ グランド・ツアー ” とは全く異質の、極めて質素な旅がヨリックが巡るフランス・イタリア周遊の旅である。牧師の身ながら謹厳実直にあらず、意外に自由な言動規範がヨリックの魅力となっている。時に涙腺を刺激する軟弱さを持ち合わせるが、[39] 人の心の動きを繊細なまでに推し量りつつ、自己の気持ちを偽ること無きヨリックの身軽な行動原理が読者の共感を勝ち得るのではなかろうか。

結

『阿房列車』の「私」が鉄道を利用して日本全国を移動するのに対し、『センティメンタル・ジャーニイ』のヨリックは主に馬車を利用する。ヨリックと他者との出会いを示すため、遭遇箇所が各章に記されはするが、スターンにとってイタリアでもフランスでも何処でも設定場面は可能である。名所旧跡に止まらず、風土の記述が皆無と言うのは紀行文学作品として珍しいのではないか。それは作者スターンが人との出会いを通して、人物の心理描写に力点を置いた為であろう。一方、『阿房列車』の「私」と各地の名士達との出会いは『センティメンタル・ジャーニイ』程に力点が置かれていない。「私」にとって教え子や知人との再会は心嬉しいものに違いなかろうが、肝心なのは狂おしいほど愛する汽車の旅に枕を重ね、宿泊地で銘酒を酌み交わすことであろう。ヒマラヤ山系と時を共有するのが「私」の無上の喜びであり、自己の存在証明ともなるからである。

『センティメンタル・ジャーニイ』では取留めなく時間が過ぎ、走馬灯の様に場面の推移がはかられる。『阿房列車』では空間的広がりはあっても、列車の時間枠が厳に存在する。二作品の根本的な違いは、前者では感傷に陥る情景に満ち、死にまつわる光景が挿入され、その度ごとにヨリックは涙にくれる。だが後者で「私」が涙するのは稀で、その際には熱き涙が流れるのである。[40] 従来の旅の常識を覆す意外性を帯びたタイトル、阿房と称する論拠に旅の目的の無さを証左とし、物見遊山の記述を恣意的に避け、食事に煩い内田がグルメ族を満足させるような陳述を意図的に省いている(100)。「私」とヒマラヤ山系が乗車する列車は毎回違うが、車中の過ごし方は大同小異。

凡人にはマンネリと化す旅程でも飽きない二人の行状は、読者に阿房然と写ると考えた内田一流のパラドックスである。型破りな旅の有り様を阿呆と称するが、本人は至って大真面目、聴衆を破顔一笑させようとも、にこりともせずして語るのである。

内田の場合は非常な遅筆で知られ、スターンの場合は意識の赴くままに陳述するが決して速筆とは申せない。内田のように旅の後で思い出しつつ筆を進める記述方法が尋常であり、[41]『センティメンタル・ジャーニイ』でヨリックは旅の途中、“ … and being determined to write my journey, I took out my pen and ink, and wrote the preface to it(*A Sentimental Journey*) in the *Desobligeant.* ” (28)と“ 一人乗り馬車 ”（desobrigeant）の中で自著を認めたと語るが、これはスターンの遊び心と解釈すべきである。[42] 物語の完結を目指し、纏まれば小出しに版行を繰り返すと言った出版経緯のため、スターンの出世作『トリストラム・シャンディ』や『センティメンタル・ジャーニイ』も完結を見ていない。『センティメンタル・ジャーニイ』は題名に上るイタリアの言及が不充分なまま、フランスを中心とした第１、２巻が1768年２月に出版され、予約購読者には翌年続巻の３、４巻が配布される予定であった。内田も自作が次第に人気を博し、請われるままに次々と旅に出ては道中話を世に問うといった形式を踏む事から、二人の作者の書き連ねる姿勢も共通する。さらに双方共にインテリ層の読者を対象とし、スターンは青踏派を含めたアパー・ミドル以上の読者層を、内田は漱石の読者層と重複する知識人を対象に、『阿房列車』によって新たに庶民層の読者開拓に成功した。紀行文学の新境地開拓の使命に燃えた意味からも、内田とスターンは極めて相似性を有していると言えよう。

スターンの場合、時の大陸周遊、特に当代のライバルであるスモレットが踏破した同一ルートを踏襲した事から、『センティメンタル・ジャーニイ』執筆には並々ならぬ決意で臨んだに違いない。スターンの旅には当時の旅日記とは全く異なる旅行記、即ち、当時全盛を極めた「グランド・ツアー」及びそうした記録的旅行記の凡俗さを嘲弄する意図が隠されている。旅行記や紀行文学作品は本来見知らぬ土地を訪ね、歴史の跡を辿る証とする考えは古来より根強くあり、内外のその種の類が受け入れられたのも、英国人の新大

陸や東方への憧憬の裏返しである。既存の周遊記とは趣を違えるべく、スターンは種々の情景を精致な描写で描き、人々との出会いと別れを本文の柱に据えた。一度行き違えると決して見えること無き運命、人々との惜別の情、生死の別れをヨリックの心理描写を中心に旅行記として脱稿を図ったのである。しかも単なる紀行文に終わること無く、主人公に見られる心の動き、神経の起伏を描き出した『センティメンタル・ジャーニイ』は極めて近代的な小説技法に則っている。一方、『阿房列車』の中で作者が生死の問題を論じる事は皆無に近いが、一期一会の世界を再現し、過去を振り返ること無く、スウィッチ・バック(53,56,91)[43]する人生の紆余曲折はあっても後退することなき旅こそ、生命が躍動する一時と記す。「雷九州阿房列車」の巻頭部分で、“行く先はあるが、汽車が走って行くから、それに任しておけばいい・・・又走って行く列車の中で、一たび何も用事がないと云う事になれば、その後から新しく用事が発生するわけもない”(215)と「私」に自問自答させているが、そこには“人生は正に敷かれた線路の上を邁進する列車の如し”とする作者内田の処世訓が吐露されているのではないだろうか。

二つの旅物語は一見全く異質の存在だが、作者が醸し出す笑いには共通要素が認められる。内田の笑いの質の証しとして読者の反応を一、二挙げることにする。一つは内田文学の文字通りの生みの親である活字職人が植字の最中に思わずつり込まれて笑ったとか。[44] 他例は縁者に内田作品を推奨するが彼の面白さは個々人に依るのではとの返答を得たという。[45] この二つの事実は内田文学は万人に受け入れられる笑いこそ生まないが、波長が合えばこれほど面白いものは無いとの証しではなかろうか。その難解さを例に挙げ、内田は現代随一の文章家と称讃する三島由紀夫の言葉“これだけの洗煉された皮肉、これだけの押し隠した芸、これだけの強い微妙さが、現代の読者にどれだけ理解されるであろうか、”[46]はスターン文学にも当てはまるかも知れない。確かに内田とスターンの笑いの本質は何処まで本気なのか、何処から冗談なのか解らぬ作者の言葉の背後に潜み、世の常の笑いでないことは無論である。スターンとヨリックの意識の流れのギャップ、つまりヨリックの分身としての独り立ちと内田と「私」との密着さとでは若干の差が認められるという事実である。内田もスターンも分身たる「私」の言動を笑うが、作者本

人はいたって真面目で、そのギャップが読者に笑いを引き起こす。ベルグソンが指摘する笑い、すなわち状況の可笑しさ、言葉の可笑しさ、性格の可笑しさの範疇ではすんなり収まりきらない、境界の枠を取っ払った類の笑いである。換言すれば、状況設定と言葉の遊び、意味の錯綜にあろう。尾篭な話題をサラリと流し、身体的特徴等への言及に深入りせず、さりげない会話などを通し、読者を決して大笑いに誘う訳には参らぬが、思わずクスッとさせる。何もしない旅行者の何処が面白いのか、と人は反論するかも知れない。だが内田もスターンも旅はすれど物見遊山に興ぜずとする信念を有し、それが旅行記執筆の姿勢として貫かれている。阿房と称すれどさにあらず、旅にあって目的を持たぬとする目的を抱き、世人には踏襲し難い旅であるが、旅のあり様が何とも可笑しく、そこに旅の精髄が内包されている。

注

本稿は日本比較文学会第35回関西大会（1999年10月30日於帝塚山学院大学）にて“内田百閒とロレンス・スターン”と題して口頭発表した内容に加筆・修正を加えたものである。

1 『ヘブリディズ諸島紀行』と訳す例もある。その他にもThrale夫妻とウェールズを旅した際のジョンソン博士の日記は後年、*A Diary of a Journey into North Wales, in the year 1774* (1816)として公にされた。

2 1765年から翌年にかけて大陸を旅し、コルシカ島では独立戦争を助け、*An Account of Corsica*(1768)を公表した。

3 メリヤス商人として1680年代に大陸諸国を旅した事もあるデフォーはジャーナリストとして、また小説家として活躍する一方、旅行記*A Tour thro' the Whole Island of Great Britain* (1724, 1725, 1727)を残している。

4 堀切直人「気違いと阿呆の道連れ」酒井英行編『内田百閒』日本文学研究資料新集22（東京：有精堂、昭和61年〔1986〕）、48頁：伊藤誓『スターン文学のコンテクスト』（東京：法政大学出版局、平成7年〔1995〕）、54-67頁

スターンに強い関心を寄せていた漱石は明治30年(1897)に『トリストラム・シャンデー』論を「江潮文学」に発表している。（江藤淳『決定版 夏目漱石』〔東京：新潮社、昭和49年(1974)〕504頁）

5 川村二郎『内田百閒論』（東京：福武書店、昭和58年〔1983〕）、111頁：伊藤整「作品解説」平山三郎編『回想 内田百閒』（弘前：津軽書房、昭和50年〔1975〕）、348頁）

6　芥川龍之介「点心」（「新潮」2月号）平山三郎『詩琴酒の人 百鬼園物語』（東京：小澤書店、昭和59年〔1984〕）、129-30頁

7　内田百閒「特別阿房列車」川端康成他編『内田百閒全集』（東京：講談社、昭和47年〔1972〕）、第７巻18頁、以下、頁数はすべて同版により文中に記す。

8　Lodwick Hartley, *Laurence Sterne : A Biographical Essay* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1968), p. 20: Lewis Melville, *The Life and Letters of Laurence Sterne* (London: Stanley Paul & Co., 1911), Vol. 1, p. 43.

9　Wilbur Cross, *The Life and Times of Laurence Sterne* (New York: Russell & Russell, 1967), pp. 93-111.

10　Wilbur Cross, *The Life and Times of Laurence Sterne*, p. 163.

11　スターンは私信にて、『トリストラム・シャンディ』執筆に関し、“ I wrote not to be fed, but to be famous ” と記し、作家としての野心を露わにしている。
cf., Lewis Perry Curtis ed., *Letters of Laurence Sterne* (Oxford: Oxford University Press, 1965), p. 90: Arthur H. Cash, *Laurence Sterne: The Later Years* (London: Methuen & Co., 1986), p. 1.

12　Laurence Sterne, *Tristram Shandy* (New York: AMS Press, 1970), Vol. 1, pp. 51-3. 以下、頁数はすべて同版により文中に記す。

13　Laurence Sterne, *A Sentimental Journey through France and Italy* (New York: AMS Press, 1970), Vol. 3, p.281. 以下、頁数はすべて同版により文中に記す。

14　福永武彦は “ 内田文学は決して私小説の類ではない。私小説か否かの議論が従来よりかまびすしいが、内田がやり玉に挙がったことはない。彼の随筆は私小説的内容を含んでいるが、世の私小説とは雲泥の差が在る。その謂れは私の魅力が全然違う ” と評し、吉田健一も “ 内田文学は西欧の作家の作風に近い ” と述べている。但し、『阿房列車』に限れば、私小説の範疇から逸脱した作品とは定め難いと論者は見る。
福永武彦「等身大」平山三郎編『回想の百鬼園先生』（東京：旺文社、昭和61年〔1986〕）、133頁参照：吉田健一 “『百閒随筆』解説 ” 平山三郎編『回想 内田百閒』、367頁参照

15　ジェイムズ夫人の夫(William)は東インド会社の要人で1767年1月にロンドンに上京したスターンと面識を得たらしい。ほぼこの頃にジェイムズ夫人同様にセンティメンタルな気質の、インドから一時帰国中のドレイパー夫人(Elizabeth Draper)とスターンは知り合うが、この出会いが後に『イライザへの日記』(*The Journal to Eliza*)として結実をみるのであった。

16　Lewis Perry Curtis ed., *Letters of Laurence Sterne*, p. 401.

17　『阿房列車』取材の旅に出る時は東京駅駅員が見送りに現れ、その彼を内田は「見送亭夢袋」と命名する。旅先の出迎えをヒマラヤ山系がその度ごとに手配するのだが、用事もないのに出かけた自分達も阿房だが、“ 待っている方がいるが、

そっちの方がおかしい ”(324)と「私」は皮肉る。

18 川村二郎『内田百閒論』、202頁

19 阿川弘之「百閒讃」平山三郎編『回想の百鬼園先生』、141頁:平山三郎『詩琴酒の人 百鬼園物語』、199頁

20 江國滋「ふるさと、まぼろし」平山三郎編『回想の百鬼園先生』、233頁

21 同志社大学に友人がいて云々(150)と、京都に立ち寄ることが予期されるが、観光地京都の面影は無い。「私」とヒマラヤ山系が古都で目にするのは御所の筋塀の下を流れる小川と、寺社の中でも凡俗な平安神宮付近で見かけた犬と、京都駅の中庭の池に泳ぐ鯉一尾にすぎない(191-2)。別の機会に京都駅に降り立つ「私」は、漱石の『京に著ける夕』を思い起こすが、すぐその足で大津に向かう(296)。

22 多田基 “「イヤダカラ、イヤダ」のお使いをして ” 酒井英行編『内田百閒』、243-5頁

23 内田扮する「私」は一人旅は出来ぬと度々『阿房列車』の中で告白している(11,36,153)。

24 永田博「由比の浜風」平山三郎編『回想の百鬼園先生』、163頁

25 類例として、物語末で女性客とヨリックが相部屋となる場面がある。暗闇の中、女主人とヨリックの間に割って入った若き子間使い女との接触は読者の想像に委ねるべく、“ I caught hold of the Fille de Chambre’s — ” (417)とダッシュに終わり、以後の記述は省かれる。

26 小林亨訳『センチメンタル・ジャーニイ』(東京：朝日出版社、昭和59年〔1984〕)、134頁、新潮社版――山口孝子、渡邊萬里訳『センチメンタル・ジャーニー』(東京：新潮社、昭和27年〔1952〕)、141頁――では「克服」とある。

27 内田家の玄関のベルの下に張られた張り紙は当主のユーモア精神溢れる字句に満ち、これこそ内田の対社会、対人間関係を象徴する言葉と見て良い。選り好みが強くて人との煩わしさを疎う一方、人恋しい内田の心理を見事に言い当て、俗世を離れて無我の境地になりきれぬ内田の思いが凝縮されているようである。

「世の中に人の来るこそうるさけれ
とは云うもののお前ではなし 獨山人
世の中に人の来るこそうれしけれ
とは云うもののお前ではなし 主人敬白」

平山三郎『実歴阿房列車先生』〔東京：旺文社、昭和58年(1983)〕、288頁

28 平山三郎『詩琴酒の人 百鬼園物語』、156頁

29 作者スターンの実生活を反映したものと考えられ、晩年は夫人と別居状態で、歌手のCatherine Fourmantelleと戯れの恋をしたり、インド帰りのドレイパー夫人への恋慕の情の噂があった。『センティメンタル・ジャーニイ』の本文にも、“ I had lighted it up afresh at the pure taper of Eliza but about three months before—swearing

as I did it, that it should last me through the whole journey— ” (pp.152-3)とイライザを示唆する箇所が挿入されている。喜捨を敢然と拒否するヨリックだが、婦人方を前に老托鉢僧と関係改善を図ろうとする彼の豹変振りが読者の苦笑を誘うが、『センティメンタル・ジャーニイ』では前作で博した笑いより、読者の涙腺を刺激する事に力点が置かれている。

30　ラ・フルールにしても、ヨリックが旅券を得ようと訪れたB. . .伯爵邸の召し使い女に、寸時の間にちゃっかり渡りをつけている（340）。但しこの話には落ちがあり、ラ・フルールはその娘にヨリックの大切な反古紙で包んだ花束を贈るが、不実な彼女はそれを忽ち同家の従僕に与え、反古紙は行方しれずとの顛末が用意されている(357-8)。

31　Edward Bloom and Lillian Bloom, “‘This Fragment of Life’: From Process to Mortality,” *Laurence Sterne: Riddles and Mysteries*, ed. Valerie Myer (London: Vision Press Ltd., 1984), pp. 57-72: 能美龍雄『ロレンス・スターンの文学』（東京：松柏社、平成6年〔1994〕）、15-37頁

32　川村二郎『内田百閒論』、33頁

33　酒井英行 “「阿房列車」の世界 ” 酒井英行編『内田百閒』、170頁

34　犬にやるとの女中頭の現実的な対応に立腹する「私」だが、内田自身も大のペット好き故、婉曲な物言いを解せないからといって、女中頭の返答に気分を害せずとも良いではないかとの意見もあろう。狭い家に所狭しと並べられた鳥籠に小鳥を飼い、飼い猫のノラが失踪すると食事も喉を通らず、ノラ失踪のエッセイ『ノラや』も残している内田の私生活から推し量るにしても、単なる犬嫌いと決められない。

35　内田が描く事務的な反応しか示さぬ女性登場人物と彼女達の描写はスターンのそれと相通じ、『トリストラム・シャンディ』のシャンディ夫人がその典型であろう。柱時計のネジの巻かれる音に反射的に連想するばかりか、夫ウォルターと義弟トービーの話を誤解して私生児の嫌疑で夫を問い詰める等、彼女には無思慮で即物的な性格が窺える。類例としてシャンディ・ホール近在のワォドマン後家が挙げられ、トービーの鼠蹊部損傷をめぐって探りを入れる様子に、彼女の唯物的言動が揶揄される。『トリストラム・シャンディ』においてトリストラムの仕込みと誕生、命名、サッシュ・ウィンドウの割礼騒ぎ等、悲劇の発端には必ず女性が関与する、或いは関与させられる事実に、スターンの女性描写の特色があろう。

36　平山三郎『詩琴酒の人 百鬼園物語』、193-5頁

37　内田と飛行機の縁浅からず、法政大学のドイツ語教授時代に学生航空研究会の会長を引き受け、昭和６年に国産軽飛行機「青年日本号」を欧州各国歴訪のため、埋め立てられたばかりの羽田飛行場離陸一番機として大空に羽ばたかせている。平山三郎『詩琴酒の人 百鬼園物語』、154-5頁：瀧井孝作 “『東京焼盡』書評 ” 平

山三郎編『回想 内田百閒』、363頁

38 『センティメンタル・ジャーニイ』でスモレット自身は “the learned SMELFUNGUS”(98)としてその衒学振りが揶揄され、彼の旅行記は“He wrote an account of them (every object), but ’t was nothing but the account of his miserable feelings.”(98-9)と酷評される。

39 Henri Fluchère, *Laurence Sterne : From Tristram to Yorick*, trans. Barbara Bray (London: Oxford University Press, 1965), pp.375-6.

40 堀切直人「気違いと阿呆の道連れ」酒井英行編『内田百閒』、48頁

41 平山三郎『詩琴酒の人 百鬼園物語』、195頁

42 スターンはさらに次章でも“I never heard, said the other, who was a *simple Traveller*, of a preface wrote in a *Desobligeant*.”(38)と一人乗り用馬車内での執筆をほのめかしている。

43 「区間阿房列車」の御殿場駅から沼津駅間でのヒマラヤ山系との会話(53)からも分かるように、各地の急な勾配の坂道に付設され、軌道にそって列車が行きつ戻りつする折り返し式の鉄道線路。急勾配の途中には停車場を設置出来ないため、列車は一旦、本線から分岐して設けられた線路に入り、後に逆行して平坦地に設けたプラットホームに導かれる。

44 竹内道之助 “『百鬼園随筆』外傳 ” 平山三郎編『回想の百鬼園先生』、72頁

45 庄野潤三「家の中の百閒」平山三郎編『回想 内田百閒』、247頁

46 三島由紀夫 “ ＜内田百閒＞解説 ” 酒井英行編『内田百閒』、37頁

Anglo-Japanese comparative studies between Hakken Uchida’s *Ahou Ressha* and Laurence Sterne’s *Sentimental Journey*

Tatehiko NOGUCHI

Key words: Uchida, Sterne, ahou ressha, sentimental

In making comparison between Uchida and Sterne, I am of the opinion that there is some correlation between them in relation with Soseki Natsume, because Uchida highly regarded Natsume who used to be an

important faculty member as a specialist of 18th century English literature in the department of English literature of Tokyo University. As everybody knows, *Tristram Shandy* had a profound influence upon Natsume in his writing *I Am a Cat*, which was imitated later by Uchida and there are a few remarkable resemblances between Uchida's maiden work, *Meido*, the Nether world, and *Ten Nights of Dreams* by Natsume. Thus, compared with Anglo-Japanese travel books, Uchida's *Aho Ressha* and Sterne's *Sentimental Journey* may have close resemblance in some points.

Until the nineteenth century most books of travel were about land journeys, although voyages by water were usually more comfortable than walking, riding horses, or sitting in wagons or coaches on rough roads. To be famous not only for *Tristram Shandy* but for the author of a travel book, Sterne, after having stayed for a few months in France and Italy for tuberculosis-treatment by a change of air, published *A Sentimental Journey through France and Italy*, full of fictitious accounts chiefly of his wagon travel in 1766. As the title of *Ahou Ressha* suggests, its author-narrator has published accounts of a railroad journey, just after each period of rail travel almost all over Japan from 1950 to 1955, accompanied by Mr. Saburo Hirayama, editor of a monthly journal of the Japanese National Railways.

As for a point of view, both works are narrated in a first person, I in *Ahou Ressha* and I or Mr. Yorick in *A Sentimental Journey*, respectively. Judged by the manners and figure of the narrator in *Ahou Ressha* which can be classified into a novel depicting the author's private life, he is exactly alike the author Uchida, but Yorick drawn by Sterne as himself may be called a fictitious figure, however vividly Yorick may remind the readers of the author Sterne. According to the grouping of travelers in *A Sentimental Journey*, it is possible to call Yorick and the narrator of *Ahou Ressha*, idle travelers for having neither intention nor destination at all, while Sterne himself gives a sentimental traveler to Yorick. Curiously enough, there is no mention of famous sights, nor of narrators' destinations, in the works of

Uchida and Sterne, although most works of itinerary would list up antiquities, scenic spots and places of historical interest. What captivates the readers of Uchida and Sterne is that it owes much to the narrators with unique personalities and their dialogues, which give suggestions of the wit and humor of both writers. Of all their characteristics of this wit and humor, the most original is demonstrated in the novelistic techniques: Uchida's usage of puns and Sterne's of dashes, asterisks and dots as a kind of typography at some risqué scenes.

As to the women characters in *Ahou Ressha* and *A Sentimental Journey*, there is a point of similarity in their characterizations. The authors of the two works describe women characters as practical, and make no mention of their reactions. Although Sterne may have characterized such women as Mrs. Shandy and Mrs. Wadman as materialistic in *Tristram Shandy*, he describes women Yorick encounters as those who readily swallow silly flatteries in *A Sentimental Journey*. Uchida also portrays maidservants at Japanese-style hotels where he stays, just like those who act as materialistic as the head maidservant at Yatsushiro does in handling rice balls the narrator left unfinished in the train from Kagoshima.

To be a travel writer, Uchida is as ambitious as Sterne. Sterne who made success in *Tristram Shandy*, intended to create a masterpiece equal to Tobias Smolett's *Travels through France and Italy*. As an excellent essayist, Uchida became known but was scarcely popular among the general public, so that he desired to obtain a great many readers by writing books on his train trip throughout the country. It may be difficult to conclude whether Sterne made a success of his new career as a travel novelist or not, since he died just after the publication of *A Sentimental Journey* and before his completing the latter part of it covering the tour of Italy, but Uchida may be successful in completing a series of *Ahou Ressha* to make his name not only as an enthusiastic fan of trains and train trips but as a travel writer.